

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<p>ベンチェ省の小規模農家および貧困世帯の暮らしが改善し、地域の人々の相互協力が強化され、自然資源が守られるようになる。</p> <p>達成度：</p> <p>小規模農家および貧困世帯は有機農業技術を学び、また有機農産物の加工に取り組み始めたばかりである。有機農産物の生産・加工に関する技術のさらなる向上と改善が必要な状態であること、安全に食品を加工できる施設がまだないこと、などから現金収入の大幅な増加、それに伴う暮らしの改善は達成できていない。有機農業を実践し、また、加工施設が建設される予定の2年目以降に経済的な効果が現れてくると思われる。一方、孤児院および高校に学校菜園を設置したことから、子供達の両親や教員の家族、近隣に住む人々の有機農業への関心が高まり、有機野菜の需要が増え、また、堆肥の原料となる牛糞が提供されるなど、地域の自然環境や人々の健康を守るための、相互協力が見られるようになった。この他、農業を営む両親が有機農業技術を実践し始めるなど波及効果が見られた。今後、この流れを強化していけるよう、学校菜園を地域の学びの場として整え、活用していく取り組みが必要である。</p>
(2) 事業内容	<p>実施した事業内容について、以下に記述する。</p> <p>1. 有機農業技術と品質管理のための参加型保証制度（PGS）の実践</p> <p>1-1. 有機農業技術研修：ビンダイ郡の有機ココナツ生産者グループに対し、有機農業技術および生態系に関する研修を12回実施した。また、有機栽培を行う3箇所の圃場の水源および土壌の検査を行った。※バーチー郡にて有機野菜生産者グループに対し、他の助成金を活用し、有機農業研修の実施、4箇所の圃場の土壌・水質検査、および雨や日差しから野菜を守るためのネット2種類の支援を行った。</p> <p>1-2. PGSを管理・運営するための能力向上研修：バーチー郡の有機野菜生産者グループに対し、PGSで必要となる相互チェックにかかる研修を1回開催した（他の助成金を活用）。なお、ビンダイ郡の有機ココナツ生産者グループは、メンバーがなかなか決定せず、有機農業研修の開始が遅れたため、2018年5月以降に相互チェックに関する研修を実施する。この他、ベンチェ省で有機農業を継続的に実践していくことを目的として、トレーナーを養成するための研修を1回実施した（事業内容の変更申請を行い、承認を得た後に実施）。</p> <p>1-3. 有機農産物を示すシール・タグの支援：有機栽培で作られていること、生産者の情報、PGSの連絡先を示した1種類のタグを作成した。</p> <p>2. 有機農産物の加工</p> <p>2-1. 有機農産物の加工・保存技術研修：有機ココナツ・バナナ加工グループのメンバーに対し、有機栽培されているココナツとバナナを活用した2種類の伝統菓子の加工・保存に関する研修を4回実施した。講師はホーチミン市のシェフおよび食品の加工・保存の専門家が務めた。この他、加工グループのメンバーが自主的にココナツの加工技術を向上させるための実習を行った。</p> <p>2-2. 伝統菓子の販売用パッケージ制作：有機ココナツ加工グループのメンバーが作った伝統菓子1種類を販売するためのパッケージを制作した。パッケージにはビンダイ郡ヴァンクオイドン村の小学生が描いた絵を活用した。この他、真空パック用機材及び専用のビニール袋を支援した。</p> <p>3. 子供を対象とした環境教育の実践</p> <p>3-1. 学校菜園の設置および有機農業技術研修：SOS村（孤児院）の敷地内に1箇所の学校菜園を設置し、必要な資材（ネットや支柱、種子、農具、案内ボード等）を支援した。また、子供たちおよび職員に対し、有機農業技術および生態系に関する研修を19回行った。</p> <p>3-2. 生態系や有機農業に関する研修：ベンチェ町教育室の積極的な参画を得られなかったため、ベンチェ省教育局の要請を受け、事業内容の変更を行い、ベンチェ省ティンフー郡にあるルオンテーヴィン高校にて学校菜園を設置した。有機農業および生態系に関する研修を11回開催した他、学校菜園設立に必要な資材（ネットや支柱、種子、農具、案内ボード等）及び土壌や野菜の窒素を測定する器材を支援した。</p> <p>3-3. ベンチェに住む消費者との交流：SOS村にて学校菜園の設置に遅延が生じ、また、有機農業技術</p>

	<p>の実践が不十分であったため、消費者との交流を開催することができなかった。一方、学校菜園を設置したルオンテーヴィン高校にて、保護者や地域の行政機関、学校菜園に関心を持つ高校の教員が参加し、交流会を行った。ルオンテーヴィン高校の学校菜園を設置した後、農業を営む生徒の両親が有機農業技術を実践し始めたり、堆肥用の牛糞を提供したり、周辺地域の行政機関等が有機野菜を購入するなど、地域の人々の関心が高まり、相互協力を促すような効果が見られた。</p> <p>4. 会合</p> <p>4-1. 月例会合：現状を把握し、課題の早期解決のためにビンダイ郡の有機ココナツ・バナナ、有機野菜の生産者グループおよび加工グループと共に月例会合を11回開催した。この他、SOS村にて8回、会合を開催した。ルオンテーヴィン高校では毎月、モニタリングを行い、研修を実施したり教員や生徒と協議を行い、早期に課題を把握し対応したり、活動計画を共に立案した。</p> <p>4-2. 日本の有機農家および流通関係者との交流会：日本の有機農家、加工グループと交流し、土づくりや食品加工の大切さ、消費者と継続的な信頼関係を維持するために必要なことについて学び、ベンチェ省における環境に配慮した持続的な地域づくりに役立つための会合をビンダイ郡、バーチ郡、ベンチェ町にて3回開催した。</p>
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>以下に達成された成果を記す。</p> <p>1. 有機農業技術と品質管理のための参加型保証制度 (PGS) の実践</p> <p>1-1. 研修の参加者の70%が内容を理解し、研修の参加者の90%が研修で学んだことを実践する。研修ごとに理解度テストを実施する他、モニタリングでの聞き取りや世帯調査で成果を測る。</p> <p>⇒達成。有機農業研修の内容に関する理解度テストを実施したところ、有機ココナツ・バナナ生産者グループでは62.5%が10問中、8問正解、37.5%が7問正解であった。また、実践の度合いについては、モニタリングの結果、研修で学んだ技術を全て実践していた。このことから、有機ココナツ・バナナ生産者グループのメンバー全員が有機農業技術研修の内容の少なくとも7割を理解し、全員が技術を実践していると言える。</p> <p>1-2. 消費者が有機農産物を認識・選択できるようになる。PGSに参加している流通業者と協働で消費者に聞き取り調査を行い、成果を測る。</p> <p>⇒一部達成。PGSに参加している流通業者が顧客である消費者に聞き取りを行った他、ホーチミン市で開催された農産物市に来ていた消費者へ聞き取りを行った結果、ほぼ100%の消費者が、本事業で支援しているベンチェ省の有機野菜生産者グループの野菜は有機野菜であると認識していた。しかし、PGSに参加している流通業者の顧客やホーチミン市の農産物市に出かける消費者の多くは、健康や食の安全への意識が高く、有機農産物に対する認識の度合いも高い。事業実施団体が一般のスーパーや市場にて任意に聞き取りを行った結果、多くの消費者が有機農産物について認識していなかった。今後も様々なステークホルダーとの連携や勉強会の開催などを通じた情報の共有・発信が必要である。</p> <p>2. 有機農産物の加工</p> <p>2-1. 研修の参加者の70%が研修内容を理解し、研修の参加者の40%が研修で学んだ技術を実践できるようになる。研修ごとの理解度テストの他、聞き取りや世帯調査で成果を測る。</p> <p>⇒一部達成。研修内容は主に実習であったため、理解度テストを実施せず、実践の度合いを評価した。研修中は講師がポイントを伝えた後、参加者がメモを取り、実習に活かしていた。また、研修後の自主的な実習においても講師から学んだポイントを加工グループのメンバー全員が実践していた。</p> <p>2-1. 貧困女性の現金収入が30%増える。活動実施前後の現金収入の変化を聞き取り成果を測る。</p> <p>⇒未達成。加工グループのメンバーである貧困女性たちは、学びながら、技術や品質を改善している途上であること、安全に農産物を加工する施設がないことを理由に業者から契約を断られるなど、商品を広く流通させる状況にまだない。そのため、現金収入の増加は達成できていない。</p> <p>3. 子供を対象とした環境教育の実践</p> <p>3-1. 学校菜園が2か所設置され、子供たちが生態系について具体的に学べる場所が設けられる。</p> <p>⇒達成。SOS村及びルオンテーヴィン高校にて学校菜園を設置した。また、子供達のみならず、近隣の住民や子供達の両親などが有機農業や生態系について学べる場所となりつつある。</p>

	<p>3-2. 研修の参加者の70%が研修内容を理解し、研修の参加者の80%が研修で学んだ技術を実践する。理解度テストとモニタリング時の聞き取りから成果を測る。</p> <p>⇒一部達成。ルオンテーヴィン高校の生徒および教員については全問正解が37%、9問正解が33.3%、8問正解が22.2%、7問正解が7.5%であった。また、実践の度合いについては、モニタリングの結果、ルオンテーヴィン高校では有機農業研修で学んだ技術を全て実践していた。この結果から、ルオンテーヴィン高校の生徒および教員の全員が有機農業技術研修の内容の少なくとも7割を理解し、全員が技術を実践していると言える。一方、SOS村では研修を早期に行ったものの、堆肥作成など学校菜園の準備に時間がかかり、実践時期が遅くなった。また、混植や輪作、自然農薬の使用等、十分に技術が実践されていなかった。このため、研修を再度行う他、モニタリングを強化する必要がある。</p> <p>3-3. 消費者が生態系や地域の環境問題について理解を深める。聞き取りで把握する。</p> <p>⇒一部達成。SOS村では学校菜園の設置に遅延が生じた他、有機農業技術の実践が不十分であったため、消費者との交流を開催することができなかった。一方、ルオンテーヴィン高校では聞き取りにより、農業を営む生徒の両親が有機農業技術を実践し始めたり、周辺地域の行政機関等が有機野菜を購入したり、見学に来るなど、地域の人々の環境問題や生態系への関心が少しづつ高まっていることがわかった。</p> <p>4. 会合</p> <p>4-1. 関係機関との定期的な会合を通じて、問題が早期に発見・解決され、スムーズに活動が進められる。議事録によって成果を測る。</p> <p>⇒一部達成。各有機農産物生産者グループやルオンテーヴィン高校との会合では問題や課題が早期に発見・解決され、スムーズに活動が進んだと言えるが、SOS村では会合ごとに活動内容や時期等について合意した後も、進捗状況に遅延が見られるなど課題が残った。モニタリングを強化するなどの改善策が必要である。</p> <p>4-2. 日本の有機農家、流通業者、加工グループの代表と交流することで、土づくりや食品加工の大切さ、消費者と継続的な信頼関係を維持するために必要なことについて学び、実践できるようになる。モニタリングや聞き取り調査によって成果を測る。</p> <p>⇒一部達成。参加した小規模農家や行政職員は、土づくりの大切さや消費者との継続的な信頼関係を維持するために必要なことについて学び、そのことを肝に銘じて生産に励んだり、会議でも繰り返し、注意事項として伝えるようになった。しかし、モニタリングを通じて、堆肥の作り方について依然として技術的な課題があることがわかったため、技術指導を強化するなどの対策を講じる必要がある。</p>
<p>(4) 持続 発展性</p>	<p>本事業のカウンターパートであるベンチエ省農業普及センターおよび各郡の農業普及所の職員が参加型保証制度(PGS)の管理・運営、有機農産物加工において責任を持って対処し、村人や生徒達を熱心にサポートしている。また、対象地域の各行政村のリーダーや職員も積極的に活動に参加し、小規模農家への支援を行っている。このことから、有機農業を実践し、農産物加工を発展させ、環境に配慮した地域づくりに継続的に取り組んでいくための地盤ができつつあると言える。一方で、ベンチエ省人民委員会や農業・農村開発局等と連携を強化し、ベンチエ省が自主的に継続的に小規模農家を支援し、環境に配慮した地域づくりを行っていくために必要な支援をベトナム政府などから受けられるようにする。また、SOS村やルオンテーヴィン高校の学校菜園を中心として子供達の両親や教員、そして周辺の行政機関等が有機農業や生態系について関心を高め、有機野菜を購入したり、一部の住民が有機農業を実践するようになった。このことから、高校や孤児院と協議を行い、学校菜園を生徒のみならず、地域の人々が学べる場となるよう準備を行っている。学校菜園については、すでに生産した有機野菜を販売し、自主的に運営していくための資金を確保しつつある。また、ベンチエ省内2郡にある3つの高校で学校菜園の設置希望が出されている他、1郡でPGSを実践したいという希望が出されている。さらに、ドンタップ省でも学校菜園とPGSの実践希望が出されている。これらの新しい地域に関しては、すでに養成しているベンチエ省の人材を研修講師として派遣したり、設置された学校菜園を見学してもらうなど、これまでに培ってきたベンチエ省での経験、ノウハウを活用する。</p>